様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ８ 月　 ４ 日現在

機関番号：３４４１９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７３０３３３

研究課題名（和文）市場経済形成期日本における地方金融組織の研究

研究課題名（英文）An Empirical Study of the regional financial association in Early Modern Japan

研究代表者
岩間　剛城（IWAMA, Koki）

近畿大学・経済学部・准教授

研究者番号：３０５３４８５４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,400,000円、（間接経費）　720,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、市場経済の歴史的な形成過程において、近世日本の農村社会における地方金融組織がもっていた構造を実証的に明らかにしようとしたのである。主な調査対象地である信濃国小県郡上塩尻村（現長野県上田市）において、永続講という長期継続的な金融組織が、市場経済化に対応しつつ形成されていた事実を確認しえた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is that we clarify the structure of the local financial associaton in farming area in Early Modern Japan.
We confirmed that the lasting mutual financial assciations 'Eizoku-ko' were founded in Kami-shiojiri village, Chisagata district, Shinano, Japan. For the regional market was active, many silkworm egg merchants lived in Kami-shiojiri village, and many mutual financial associations were organized.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：金融講　上塩尻村　農村金融組織

１．研究開始当初の背景

本研究は、これまでの日本金融史研究では別々に論じられる傾向が強かった、近世金融史と近代金融史の研究状況を踏まえつつ構想された。

明治前期の日本においては、国立銀行の設立に止まらずに、多数の私立銀行・銀行類似会社が設立・経営されていた。近代金融史に関する先行研究では、明治前期においてこのような金融機関の濫設が生じた背景として、徳川時代の金融組織の状況を検討する必要があることが、朝倉孝吉『明治前期日本金融構造史』（岩波書店、1961 年）において指摘されてきた。しかしながら、近代における地方金融機関の状況を念頭に置きつつ、近世期に結成された農村金融組織について、その出資・貸付の状況も含めて考察する事は、これまでの日本金融史研究では必ずしも十分には行われて来なかった。

例えば、日本国内有数の製糸業が展開していた、明治期の長野県に関する地方金融史研究の成果としては、山口和雄編『日本産業金融史研究　製糸金融篇』（東京大学出版会、1966 年）が、日本経済史研究では著名である。同書では、日本銀行や都市銀行からの資金貸付を受けつつ、小県郡上田町に店舗を有していた第十九国立銀行をはじめとする地方金融機関が、長野県の製糸家に融資を行っていた状況が描かれている。しかし、同書では小県郡に設立された地方金融機関の状況について、近世から通時的に検討するという作業は行われなかった。問題関心、および対象とする時期について、本研究とは相違があったためである。

他方で、近世農村における無尽・頼母子講などの庶民金融の状況についても、森嘉兵衛『無尽金融史論』（法政大学出版会、1982 年）をはじめとして、近世金融史研究において数多くの研究蓄積がなされてきた。しかし、近世農村金融と近代農村金融との関連性については、飯島千秋「幕末期における蚕種業の展開と農村金融（1）（2）」（『信濃』第 29 巻 6・7 号、1977 年）同「幕末維新期の市場構造と蚕糸金融」（津田秀夫編『解体期の農村社会と支配』校倉書房、1978 年）などでの指摘はあったものの、個別の金融組織の機能・講組織の構成員の状況については、近世金融史研究においては必ずしも正面から取り上げられて来なかった。

以上のような日本の近世金融史・近代金融史に関する先行研究の状況を踏まえつつ、近世期における金融組織の状況を実証的に検討することが、本研究を開始する際の問題意識であった。このような問題意識を持った上で、実証的に研究を進めていくためには、近世期の金融組織に関する文書が残存している村落の資料調査研究を、継続的・集中的に行う必要があった。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本の近代化＝市場経済化過程において、農村地域で多数形成されていた農村金融組織について、その構造・性格・歴史的変容を、地方の文書資料に基づいて実証的に明らかにしようとするところにあった。その際には、村落内におけるさまざまな社会経済的な人的関係が、農村金融組織の形成・展開のあり方にどのように影響していたのかについても注目した。

このような視点から研究を行う際に、対象とする地域を選択するのに当たっては、近世期の金融組織に関連する文書が多数残存しているのに加えて、村内在住者の基本的状況を確認できる宗門人別帳や村政関連文書、各家の経営文書等が多数残存している地域であることが必要な条件であった。

このような条件を満たしている事より、本研究で研究対象とした地域は、信濃国小県郡上塩尻村であった。そして本研究は、近世日本の農村地域において市場経済化に対応していった地方金融組織の形成・展開過程を考察するという点で、単なる日本国内の一地域の事例研究にとどまらない論点を提示しようとするものであった。

３．研究の方法

本研究では、オーソドックスな歴史学的な手法に基づいた、資料調査と資料分析を基礎とする実証的な作業・検討が中心であった。対象地は、近世後期には国内有数の蚕種生産地帯であった信濃国小県郡上塩尻村であった。さらに小県郡上田地方における上塩尻村の状況・特徴を確認するために、上塩尻村の周辺に所在する村に残された文書史料も含めて、継続的に調査を行った。

本研究での独自の作業としては、信濃国小県郡上塩尻村の文書が保存されている長野県上田市立博物館を中心に、金融講・銀行に関する古文書資料調査を実施して、撮影・データ整理を継続的に行ったことがまず挙げられる。その際には、研究初年度である 2011 年度に購入したノートパソコン・デジタルカメラ・記録メディアを、3 年間の研究期間において継続的かつ積極的に利用した。

加えて、近世・近代農村に関連する学会・研究会に参加をして、近世・近代の農村社会における金融講・銀行に関連する情報の獲得に努めた。

さらに農村金融関連図書・長野地方史関連図書を購入して、過去の金融史・地域史研究においてなされた、金融講・農村金融組織に関する議論についての再確認を行った。

そして、長野県上田市立博物館を中心として、継続的に撮影した旧上塩尻村関連文書から確認しえた情報に基づいて、農村金融組織への積立出資者・貸付者に関する史料データベースを作成した。これにより、上塩尻村において結成された多数の金融組織の状況を

展望しうる手がかりを得た。
　しかし、このデータベース作成作業には研究当初に想定していた以上に、多大の時間と労力を必要とした。そのため、上塩尻村の金融組織についてのデータベースは部分的に利用できるところまで進んだが、作成途上であり、完成には至らなかった。

４．研究成果

　本研究で行った実証的な作業・検討を通じて、信濃国小県郡上塩尻村における農村金融組織について、以下のような事実を確認することができた。
　研究内容の一部分については、2012 年 5 月に名古屋大学で開会された社会経済史学会全国大会において報告を行った。その際には、下記に述べたような事実の提示と合わせて、今後さらに取り組むべき課題も改めて確認させられることになった。

　①上塩尻村においては、多数の農村金融組織が結成されていた。その中で、天保期から安政期にかけて組織された永続講は、一回ごとの会合で集まった講金が、講の構成員全員に行きわたった時点で満会となって組織を解散するという、通常の満期解散講とは異なった仕組みであった。永続講は、講に資金を積み立てていた各講員が属する家の存続を議定にうたっていた、長期継続的な資金積立組織であった。永続講の中には、30 余りの講が結成されていた。それぞれの講では、講によって若干の人数の相違があるものの、1 つの講あたり約 20 人が講への継続的積立を行う講員となっていた。永続講では家名存続のため、講加入権の売買が否定されていた。また、一度積み立てた永続講の積金は、各講員の意思で自由に引き出すことができなかった。さらに永続講においては、講員の死後、相続にともなう構成員の変更によって講としての継続が崩壊しないように、議定が定められていた。

　②上塩尻村永続講への積立者および貸付先については、資料的制約とデータベース作成作業の関係で、全員分の居住町村や家業について確定をすることはできなかった。積立者・貸付先について資料から判明した者は、上塩尻村に居住していた蚕種商人が中心となっていた。ただし永続講に講を積立てていた講員、および永続講による資金の貸付先は、上塩尻村に居住していた者だけでは完結していなかった。上塩尻村永続講では、城下町であった上田町や、上塩尻村の隣村であった秋和村・下塩尻村に居住する者も講員として加わり、資金の積立を行う事例が見られたのである。また永続講による資金の貸付先は、蚕種商人のみに止まらなかった。永続講による貸付先としては、上塩尻村や上田町の居住者が中心であったが、小県郡内の複数の村に広がっていたのである。上塩尻村永続講は、上塩尻村内の構成員のみに止まらない形で、地域金融組織として展開していた事を指摘できる。

　③上塩尻村の周辺町村においても、上塩尻村永続講に類似した、長期継続的な資金積立組織が結成されていた。その一例として、上塩尻村の隣村である下塩尻村・秋和村、および城下町の上田町においても、永続講という名称で、長期継続的な積立講が組織されていた事を確認できた。下塩尻村・秋和村・上田町で組織されていたこれらの講は、上塩尻村で組織された永続講と名称は共通していた。しかし、講への資金積立を行っていた講員の構成は、上塩尻村永続講とは異なっていた。
　以上のような資料の状況から、上塩尻村永続講を検討したのと同様の分析視角から、信濃国上田地方の地域金融組織について、さらなる分析作業を進められる可能性があることが判明した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0 件）

〔学会発表〕（計　1 件）
①<u>岩間剛城</u>「蚕種取引と金融構造」社会経済史学会第 81 回全国大会、2012 年 5 月 13 日、於名古屋大学。

〔図書〕（計　0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
岩間　剛城　（IWAMA　Koki）

研究者番号：30534854

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：